

「日本文化論」の授業の試み

神仏習合と分離を題材に

杉山 芳寛

はじめに

「この仏像、何か意味があるのですか。」

二〇一三年の夏、湯殿山神社参籠所の参詣者の一団は、神社の景観と雰囲気を感じしながら、同所に安置されていた木造胎蔵界大日如来坐像について私に尋ねた。

今は鶴岡市の青龍寺所蔵の、かつて近くの仙人沢行屋にあった旧湯殿山大権現の本地仏であるという、解説文そのままの说明の拙さもあり、彼らは今一つ腑に落ちない様子だった。

廃仏毀釈により本地仏が湯殿山を離れてから、一四〇余年が経過していた。

一 ナショナリズム(国民主義)としての「国史」「文化」「伝統」

一九九〇年代には、ユーゴスラビアなど各地の民族紛争によ

り、新たな国民国家とその「国史」や「国民文化」が次々に誕生した。

歴史や文化はナショナリズムの現れである。やがて私は言語論などの影響も受けながら、日本史や日本文化の相対化、つまり「日本史」や「日本文化」がそう語られているのは何故か、を前提とした「日本文化論」の授業を試みるようになった。

その方法は構造主義的に言葉の誕生の具体例の紹介や、B Andersonのいう「創られた伝統」を日本近代史に探ることである。

題材としては網野善彦がこだわった「日本」と「天皇」という言葉を始めとして、高校生の実存を踏まえて「LOVEと恋愛」、「バレンタインデーとホワイトデー」、「桜」(ソメイヨシノ)・「鯨食」・「近代家族」そして「神仏習合と分離」などである。

二 なぜ神仏習合と分離なのか―鶴岡八幡宮寺を例として―

「神仏習合と分離」を題材とした理由は、はじめにで紹介した湯殿山の例のように、先ずは「神仏習合」の忘却である。史跡の景観の歴史性・政治性とも関連するが、人は古い神社仏閣を見るとそれを無条件に昔からの景観と思ひ込みがちである。

次にその記号化である。「シンブツシユウゴウ・ブンリ」を

歴史の教科書などで言葉としては知っていても、「神仏習合」こそ、歴史の事実において「日本の文化や伝統」であったこと、「分離」は多くの地域で起きた決して誇張ではなく文化革命や、人々の心性の転換であったことが十分に理解されていない、と私は経験的に強く感じるからである。

このことを鶴岡八幡宮寺を例に考えてみたい。その簡単な歴史は以下の通りである。

【二〇六三年】

源頼義が建立、以後一四五年間は「鶴岡八幡宮」の時代。

【二二〇八年】

神宮寺が創建され、以後六六二年間は「鶴岡八幡宮寺」の時代。例えば公暁は八幡宮寺の「別当」つまり社僧や僧の長であった。

二〇一一年の秋、八幡宮内の鎌倉国宝館では『特別展 鎌倉×密教』が開催され、密教をその根幹とした中世の八幡宮寺の旧本地仏の十一面観音菩薩坐像など、習合関係の品も多数展示されていた。

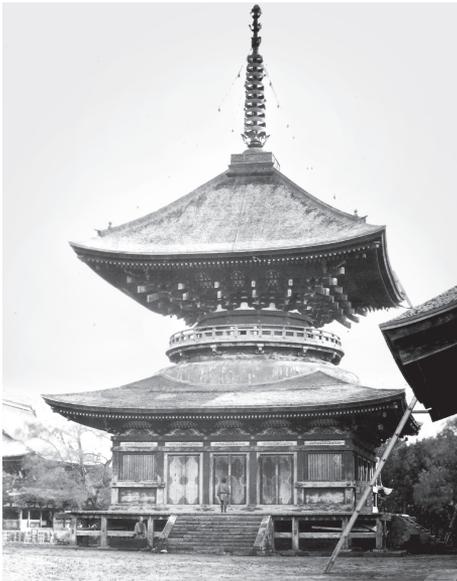
境内北西の道端には八幡宮の別当寺であった二十五坊跡の碑が建ち、幕末にイギリスのF・ペアトが撮影した大塔など、破壊される前の旧境内の写真も今日ではよく知られている。

宝物殿には「若宮大権現」などの扁額があり、祭礼絵巻には多くの他の神社と同様、供僧たちの列が描かれている。

【一八七〇年】

廃仏毀釈で神宮寺は廃絶。二〇一四年の今日まで一四四四年間、再び「鶴岡八幡宮」の時代。

今日の鶴岡八幡宮の一般的な歴史認識は、「頼朝以来の景観を留める日本文化の典型」であろう。だがその時、八幡宮寺の時代がほとんど忘却された、帚木蓬生のいう「架空の物語を押しつけられている」ような違和感を感じるのは、私だけではない。



鶴岡八幡宮大塔 (F・ペアト撮影、厚木市郷土資料館蔵)

☆ 神道とキリスト教

① 神仏分離令

i) 神仏習合を否定

〔奈良～江戸時代末（約1100年）に及ぶ「日本の伝統」
仏教と神道が、仏教が主で融合 例. 神宮寺
本地垂迹説・・・仏が本体で神はその現れ＝「権現」

ii) 廃仏毀釈

→各地で寺院・仏像の破壊 例. 〔奈良興福寺
鎌倉鶴岡八幡宮寺
金剛宝寺
（香取神宮の神宮寺）

② 「創られた伝統」としての各神社の景観

i) 近代に意味づけられる（とくに神仏習合を忘却）

ii) 遙かな過去から続く「日本の伝統」として演出

iii) 他に 〔地方改良運動（1908年）による神社の整理
「紀元2600年」（1940年）の歴史ブーム
高度経済成長（1960年代）

神仏分離・習合授業の実践（山川出版社『新日本史B』P238「神道とキリスト教」板書事項案の一部）

いはずである。

明治半ばのナショナリズムの確立により、「日本文化」という概念も成立した。神仏習合に限らず、その歴史性を踏まえた「日本文化論」でなければ、自分も授業で「架空の物語」を再生産することになる、と思うのである。

三 神仏習合・分離史跡のフィールドワーク

近年では山川出版社の『歴史散歩』シリーズを始め、地方史関係の書籍やネット上でも神仏分離・習合についての情報が充実するようになった。以下では、授業と関連させたこだわりの実践例をいくつか紹介してみたい。

〔千葉県関係〕

① 香取神宮別当寺の金剛宝寺跡地

現在は一面竹藪になっているが、神宮の祖霊社内に手水石と二体の石仏が残る。

香取市内の観福寺には、旧本地仏の懸仏がある。

二〇一三年の初夏、国学院大学博物館の「祭礼絵巻にみる日本のこころ」展では香取神宮神幸祭絵巻が展示され、その解説文によると、絵巻には他に神宮寺や金剛力士の場面もあるそうである。

余談であるが、現本殿が一九四〇年に完成したという事

実が示すように、神宮はケネス・ルオフのいう「紀元二六〇〇年」の景観でもある。

② 大山不動尊（鴨川市）

正確には高蔵神社。廃仏で毀されたのか、参道沿いの石仏群と、神社の一社殿として残った通称の由来である旧不動堂の存在は、残存していること自体が貴重といえる。

〔修学旅行・遠足関係〕

① 宮島の大聖院（広島県）

厳島神社の旧別当寺で、本地仏の十一面観音像を安置している。なお、厳島神社にも五重塔や旧千畳閣（現豊国神社）など、仏教関連の建築物が残る。

二〇〇八年、当時勤務していた千葉県有数の進学校での修学旅行の際、習合の十分な事前学習の甲斐なく、厳島神社見学の後で一キロ余りの坂道を大聖院まで登ったのは、三三〇名の生徒の中の十数人だった。私が「国民」レビューで習合の忘却を確信した経験の一つである。

また厳島神社のみと、大聖院にも参詣する人数を比較したらどうであろうか。例えば、性格が類似する日光東照宮と輪王寺を同じように比較したら如何であろうか。

② 興福寺関係（奈良県）

廃仏毀釈の風潮のなか「五重塔が二束三文でも買い手が

付かなかった」という言説が有名である。

奈良地方裁判所は主要な塔頭の一乗院の跡であり、唐招提寺に移築された御影堂はその遺構である。また、奈良ホテルに隣接する旧大乘院庭園には、明治十五・六年頃まで主要塔頭の大乗院の建物が残っていたという。あと一五年ほど残れば、「国宝」観念の成立で保存されたであろう。

③ 談山神社（奈良県）

京都の聖護院が別当だった旧多武峰の妙楽寺である。東大門の先の参道と石垣上には、塔頭跡地が残る。

秘仏の談峯如意輪観音像が旧講堂の神廟拝所に安置され、有名な十三重塔を筆頭に境内全域に習合時代の雰囲気濃厚に漂っている。

④ 江ノ島神社（神奈川県）

江ノ島入口の青銅製の大鳥居には、「願主下之坊」や「新吉原」建立と刻字されている。旧別当寺の岩本院が旅館として残ったのが岩本楼である。

旧下之宮の辺津宮の本地堂跡に宝物殿があり、隣の八坂神社は旧天王社である。旧上之宮の中津宮には旧楼門建立の碑があり、一八七三年に破壊されたと説明がある。

腰越の小動神社は、一九三〇年の太宰治心中事件の現場であるが、江戸時代までは八王子大権現であり、牛頭天王

も祀っていた。境内の石鳥居には、「別当 隆之 進求之」と刻字がある。

⑤熊野三山（和歌山県）

熊野本宮の参道には、数多の「熊野権現」の幟が翻える。だが、「権現」や「牛頭天王」などの「仏語」を禁止（現に「牛頭天王」は消滅）した、一八六八年三月二八日付けの神祇官事務局達は、現在どうなっているのだろうか。

仮に無効として、「権現」なら阿弥陀如来が本地の、今も理念上は仏教関係施設という自己認識、と理解してよいのか。それともさり気なく習合が復活している、と素直に考えればよいのか。

⑥戸隠神社（長野県）

明治にいたるまで戸隠山顕光寺であり、有名な古道沿いには十二の院坊跡の石垣や、大講堂跡・観音堂跡の礎石が残っている。

⑦湯殿山神社（山形県） 関連

その別当を勤めた四寺のうち、注連寺と大日坊は今日も寺として存在する。

本道寺は口之宮湯殿山神社となり、大日寺は一八七五年に大井沢湯殿山神社と改称されたが、一九〇三年の大火でほぼ全焼したその旧境内は、大寺院の跡地であることが一

目瞭然である。

⑧出羽神社（旧寂光寺、山形県）

随神門は旧仁王門であり、有名な五重塔は破壊を免れて残ったもの。

一の坂を上った本坊（旧宝前院）跡周辺には、歴代別当や高僧の墓が散在している。『奥の細道』の芭蕉句碑がある南谷の旧紫苑寺跡の庭園は、近年発掘・整備された。

山上の齋館は唯一残った修験の院坊の旧華藏院であり、館内にはかつての「羽黒三所大権現」の扁額が掛かる。

三神合祭殿は旧本堂である。歴史博物館の多数の佐藤仏像コレクションは、散逸した寂光寺の仏像を収集したものである。修験者を承認した「寂光寺」別当の署名印入りの補任状など各種文書が、神仏習合の時代を明瞭に物語る。

近隣の荒沢寺が旧奥の院であり、羽黒山修験本宗として残り、神仏習合の修験者の修行が今も行われている。

おわりに 「徒然草第五二段」について

「仁和寺にある法師」

仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を拝まざりければ、心憂くおぼえて、あるとき思ひ立ちて、ただひとり徒歩よりまうでけり。

極楽寺、高良などを拝みて、かばかり（八幡宮へのお参りはこれだけだ）と心得て帰りにけり。

さて、かたへの人に会ひて、「年ごろ思ひつること果たしはべりぬ。聞きしにも過ぎて（八幡大神の御神威を）尊くこそおはしけれ。そも、参りたる人ごとに山へ登りしは、何事かありけん。ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。」とぞ言ひける。

少しのことにも先達はあらまほしきことなり。

*（ ）内の口語訳は石清水八幡宮のHPから。

歴史上の文脈では「八幡大菩薩」であるのを、「八幡大神」としているのは神仏習合の忘却につながるのではないだろうか。

石清水八幡宮はその全域が鶴岡と同様、本来は八幡宮寺である。山頂の本殿に至る参道には松花坊跡など随所に諸坊跡があり、本殿の奉納石塔群には「〇〇坊」の刻字も残る。

徒然草五二段は、素直に読めば驚きのテキストである。仁和寺という名刹の一僧侶にとつてさえ、極楽寺（一八六八年一月、鳥羽伏見の戦いで焼失）という別当寺は、「聞きしにも過ぎて尊」かつたのである。

この例に倣えば、今日私たちは逆に現存する石清水八幡宮の「山」ばかりを見て（教えて）、「かばかりと心得」てはいないだろうか。

ただし、神仏習合の痕跡を感じるためには「少しのことにも先達」と、好奇心が「あらまほしきこと」なのは云うまでもない。

（すぎやま・よしひろ／千葉県立松戸六実高等学校）